名誉教授土肥恒之著作目録

土肥恒之先生著作目録作成委員会

凡例

1　著作物は、それぞれの項目ごとに発表年月の古い順に並べてある。
2　刊本名・雑誌名には二重カギ括弧（『』）を附してあるが、論文・論説名等には、通例に反して、カギ括弧（「」）を附していない。
3　事典項目は、原則として項目名をカギ括弧でくくって五十音順に列挙したが、それぞれの該当頁は煩雑になるため附していない。ただし、『体系経済学辞典』所収の項目は、五十音順ではなく「体系的分類法」にしたがって配列されているので、該当ページを附した。
4　標題は、原則として初出時の表現に準じている。

①著書・共著・編著

『ロシア近世農村社会史』　創文社　1987.3
『「死せる魂」の社会史―近世ロシア農民の世界―』　日本エディタースクール出版部　1989.1
『ロシア皇帝の虚像と実像―ツァーリ幻想と民衆』　福武書店　1992.7
『ピョートル大帝とその時代―サンクト・ペテルブルク誕生―』　中央公論社　1992.9
『ロシア史』第２巻（世界歴史体系）　山川出版社　1994.10（共著）
『「ブルジョア史学」と「マルクス主義史学」の狭間で』（Study Series 34）　一橋大学社会科学古典資料センター　1996.3
『ヨーロッパ近世の開花』（世界の歴史17）　中央公論社　1997.3（共著）；中公文庫版　中央公論新社　2009.1
『岐路に立つ歴史家たち―20世紀ロシアの歴史学とその周辺―』　山川出版社　2000.3
『ロシア史・新版』（世界各国史22）　山川出版社　2002.8（共著）
『ステンカ・ラージン―自由なロシアを求めて―』（Historia 012）　山川出版社　2002.11
『よみがえるロマノフ家』（講談社選書メチエ 326）　講談社　2005.3
『ロシア・ロマノフ王朝の大地』（「興亡の世界史」第14巻）　講談社　2007.3
『地域の比較社会史―ヨーロッパとロシア―』　日本エディタースクール出版部　2007.10　（編著）
『図説　帝政ロシア―光と闇の二〇〇年―』（ふくろうの本）　河出書房新社　2009.2

②訳書

クリュチェフスキー『ロシア農民と農奴制の起源』（社会科学ゼミナール68）　未来社　1982.6
監訳　モイナハン『ロシアン・センチュリー―発掘された秘蔵写真が語るロシア100年の真実―』　同朋社出版　1995.1
共訳　バーンズ『V・O・クリュチェフスキー―ロシアの歴史家―』彩流社（近刊）

③論文・論説

「領地管理令」研究への一視角―18世紀初頭チェルカッスキイ公領の場合―　『人文研究』（小樽商科大学）　55　1978.3　pp.75-101

16-17世紀北ロシアの修道院と農民闘争　『人文研究』59　1979.12　pp.1-28

ロシア近世農民闘争とイデオロギーの問題―ソヴェト史学の現況について―　『人文研究』61　1980.12　pp.148-178

人頭税の導入について―ピョートル改革期農村社会の予備的考察―　『社会学研究』（一橋大学）　21　1982.8　pp.263-332

ピョートル改革期の村と農民嘆願書　『一橋論叢』89-1　1983.1　pp.87-103

所謂世帯の「空白」について―ピョートル改革期農村社会の予備的考察（続）―　『社会学研究』　22　1984.2　pp.63-139

逃亡農民をめぐる若干の問題　『ロシア史研究』39　1984.5　pp.2-13

農民自治の伝統―17世紀北ロシアの郷について―　『社会史研究』8　1988.3　pp.97-130

なぜ農民の歴史を学ぶのか―ヴェ・イ・セメフスキー著『女帝エカテリーナ二世治世下の農民』（第一巻、一八八一年）によせて―　『一橋論叢』103-4　1990.4　pp.106-122

ある強制移住―ピョートル改革期農村社会の一断面―　『一橋論叢』112-2　1994.8　pp.1-24

岐路に立つ歴史家―ロシア史学史のための覚書―　『一橋論叢』113-2　1995.2　pp.1-20

ドン・コサックとその世界―失われた「地域」―　『地域の世界史』第５巻（移動の地域史）　山川出版社　1998.3　pp.122-156

移住と定住のあいだ―近世ロシア農民再考―　『一橋論叢』122-4　1999.10　pp.1-14

ロシア帝国とヨーロッパ　岩波講座『世界歴史』第16巻（主権国家と啓蒙）岩波書店　1999.10　pp.103-121

社会経済史学の萌芽と「挫折」―ドイツとロシアの場合、一八八〇～一九三〇年代―　山田達夫、徳永光俊編『社会経済史学の誕生と黒正巌』思文閣出版　2001.3　pp.3-25

歴史の見直しと歴史家―最近のロシア史研究から―　『東欧史研究』23　2001.3　pp.83-87

近代の閾に立つツァーリ権力―一七世紀末のロシア―　岩波講座『天皇と王権を考える』第２巻（権力と統治）　岩波書店　2002.6　pp.127-150

ロシアにおける地域史の問題　『一橋論叢』129-2　2003.2　pp.1-20

大正期の欧州経済史学と「福田学派」『一橋論叢』132-4　2004.10　pp.70-84

ロシア―「大使節団」と西欧化―　草光俊雄･宮下志朗編『改訂版　地域文化研究Ⅲ―ヨーロッパの歴史と文化―』放送大学教育振興会　2007.4　pp.105-115

国境警備･戦争･入植―近世ロシアの軍隊と社会―　阪口修平･丸畠宏太編著『軍隊』近代ヨーロッパの探求⑫　ミネルヴァ書房　2009.6　pp.107-144

日本学を拓いたロシア人―エリセーエフとネフスキー―　一橋大学社会学部編『連続市民講座　人と社会　つながりの再発見：コミュニケーションの変容』彩流社　2009.12　pp.199-224

人口圧と農業改革―18世紀後半のロシアの事例から―　大島真理夫編著『土地希少化と勤勉革命の比較史―経済史上の近世―』ミネルヴァ書房　2009.12　pp.313-337

④研究ノート、学会動向、書評など

ノート　ア・ゲ・マニコフのロシア農奴制社会研究―『発展』についての覚書―　『一橋研究』28　1974.12　pp.159-174

ノート　ラージン蜂起前夜の逃亡農民　『一橋論叢』73-1　1975.1　pp.79-86

ノート　一七世紀ロシアの所領構造・覚書　『一橋論叢』75-2　1976.2　pp.70-77

書評論文　分離派教徒の世界― R.O.Crummey, The Old Believers and the World of Antichrist によせて―『人文研究』（小樽商科大学）　53　1977.3　pp.125-142

動向　ロシア近世経済史研究の新動向　『商学討究』29-4　1979.2　pp.17-32

動向　ピョートル改革期の社会と民衆　『社会史研究』1　1982.10　pp.238-259

書評　A. Sydorenko. *The Kievan Academy in the Seventeenth Century*（Ottawa, 1977）194 p. O. Subtelny. *The Mazepists.Uklainian Separatism in the Early Eighteenth Century*（New York, 1981）280 p. 『一橋論叢』89-5　1983.5　pp.123-132

動向　ロシア農民戦争―Ｂ・Ｂ・マヴロージンの見解をめぐって―　社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望：社会経済史学会創立50周年記念』有斐閣　1984.9　pp.255-262

批評　東欧の絶対主義―鳥山報告に寄せて―　『ロシア史研究』41　1985.11*　pp.44-47

＊10月号だが、発行日は11月５日

書評　鳥山成人著『ロシア・東欧の国家と社会』『ロシア史研究』43　1986.8　pp.39-43

動向　ヨーロッパ近代・東欧（一九八六年の歴史学界　回顧と展望）『史学雑誌』96-5　1987.5　pp.340-344

動向　東欧における絶対主義の形成　『一橋論叢』97-5　1987.5　pp.132-145

書評　山本俊朗著『アレクサンドル一世時代史の研究』『社会経済史学』54-5　1989.1　pp.726-730

動向　ヨーロッパ近代・東欧（一九八九年の歴史学界　回顧と展望）『史学雑誌』99-5　1990.5　pp.361-365

書評　鈴木健夫著『帝政ロシアの共同体と農民』『週刊読書人』1990.5.21

書評　Ｒ・Ｇ・スクルィンニコフ著　栗生沢猛夫訳『イヴァン雷帝』『信濃毎日新聞』1994.7.3

動向　ヨーロッパ近代・一般（一九九四年の歴史学界　回顧と展望）『史学雑誌』104-5　1995.5　pp.336-338

書評　アレクサンドル・リヴォヴィッチ・シャピーロ著『最古代から一九一七年までのロシア歴史学』増訂第二版（モスクワ、一九九三年）『ロシア史研究』57　1995.8　pp.77-79

ノート　ヴォローネジ地方の歴史から　『一橋論叢』114-3　1995.9　pp.124-131

書評　和田春樹・家田修・松里公孝編著『スラブの歴史』『社会経済史学』63-1　1997.5　pp.123-125

補論　近世のロシア　近藤和彦編『西洋世界の歴史』山川出版社　1999.9　pp.207-218

書評　Ｉ・Ｓ・ベーリュスチン著『十九世紀ロシア農村司祭の生活：付　近代ロシアの国家と教会』『週刊読書人』　1999.11.5

書評　Ｒ・Ｅ・Ｆ・スミス／Ｄ・クリスチャン著（鈴木健夫・豊川浩一・斎藤君子・田辺三千広訳）『パンと塩―ロシア食生活の社会経済史―』『社会経済史学』66-1　2000.3　pp.108-110

ノート　十八世紀末のヤロスラフ地方　『一橋論叢』124-2　2000.8　pp.105-113

動向　「欧州経済史」の成立　社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望：社会経済史学会創立70周年記念』有斐閣　2002.8　pp.3-14
解題　昭和初年の「ウェーバーとマルクス」 黒正巌著作集編集委員会編『黒正巌著作集』第４巻（社会経済史の研究）大阪経済大学日本史研究所／思文閣出版　2002.9　pp.323-336
書評　共同体的秩序を深く抉る―鈴木健夫『近代ロシアと農村共同体―改革と伝統』を読んで『創文』471　2004.12　pp.20-24
書評　松木栄三編訳『ピョートル前夜のロシア―亡命ロシア外交官コトシーヒンの手記―』『社会経済史学』70-6　2005.3　pp.106-108
書評　末永航『イタリア、旅する心―大正教養世代がみた都市と美術―』『HQ』（一橋大学広報誌）vol.10　2006.1　p.52
概要　近世ロシアの軍隊と社会　『ヨーロッパ史における軍隊と社会』（研究代表者阪口修平）平成15～17年度科学研究費研究成果報告書　2006.3　pp.44-51
書評論文　帝政ロシアの地域史家たち―ベルディンスキフ著『郡の歴史家たち』に寄せて―『社会経済史学』72-6　2007.3　pp.89-94
書評　豊川浩一著『ロシア帝国民族統合史の研究―植民政策とバシキール人』『社会経済史学』73-4　2007.11　pp.101-103
動向　ヨーロッパ近代・一般（二〇〇八年の歴史学界　回顧と展望）『史学雑誌』118-5　2009.5　pp.329-331
解題　バーンズのクリュチェフスキー伝について　バーンズ『クリュチェフスキー―ロシアの歴史家―』彩流社（近刊）

⑤エッセイ、事典項目など
「民衆蜂起」（pp.125-126）「農民解放」（p.128）「ミール共同体」（pp.138-139）「シュラフタ」（pp.145-146）『体系経済学辞典』第６版　東洋経済新報社　1984.11
『死せる魂』の社会史的背景　『創文』274　1987.1　pp.34-36
博士論文要旨『ロシア近世農村社会史』『一橋論叢』99-4　1988.4　pp.591-596
神学校からの逃亡―十八世紀ロシアの村司祭とその子供たち―　『窓』（ナウカ社）68　1989.3　pp.16-20
「ドン［川］」「北方戦争」「ポルタワ」「マゼパ」「ラージンの乱」『ロシア・ソ連を知る事典』平凡社　1989.8
共同体と移転の自由：中世ロシアの土地と農民　週刊朝日百科『世界の歴史』47　1989.10.15　pp.B-316-317
ピョートル大帝　週刊朝日百科『世界の歴史』88　1990.8.5　pp.C-554-557
“国営”居酒屋の苦い酒：しぼりとられるロシア農民　週刊朝日百科『世界の歴史』94　1990.9.16　p.D-598
凍土の開拓：シベリアの流刑囚と農民　週刊朝日百科『世界の歴史』104　1990.11.25　pp.D-658-661
エルベからウラルまで　『創文』318　1991.1　pp.12-17
エルベからウラルまで　『一橋大学社会科学古典資料センター年報』11　1991.3　pp.9-12

ピョートル大帝と「上からの革命」『季刊歴史読本ワールド：特集ロシア帝国の興亡』新人物往来社　1991.11　pp.62-67
ロシア農民と貴族の生活　上掲書　pp.150-157
旧ソ連の歴史家と歴史学　『創文』340　1993.1　pp.6-10
競走馬の故郷　『一橋大学ニュース』268　1994.4　pp.16-17
編集『阿部謹也先生著作目録』日本エディタースクール出版部　1995.2
ピョートル一世：西欧に憑かれた専制君主　今井宏編『人物世界史２・西洋編18～20世紀』山川出版社　1995.5　pp.12-15
エカチェリーナ二世：啓蒙君主の蹉跌　上掲書　pp.16-19
「海（ロシアの）」『歴史学事典』第３巻（かたちとしるし）弘文堂　1995.7
「儀礼（ヨーロッパの）」「皇帝崇拝／国王崇拝（ロシア・東欧の）」「請願」「逃亡（ヨーロッパの）」「偽ドミートリー」「パルチザン」「ポグロム」「ラージンの乱」『歴史学事典』第４巻（民衆と変革）弘文堂　1996.12
「クリュチェフスキー」「コスミンスキー」「スミーリン」「ネーチキナ」「プラトーノフ」「ボゴスロフスキー」「ポルシュネフ」「ミリュコーフ」『歴史学事典』第５巻（歴史家とその作品）弘文堂　1997.10
1928夏・歴史家たちのオスロー　『創文』399　1998.6　pp.10-13
歴史学における一九二八／二九年　『創文』400　1998.7　pp.1-5
カール12世とナルヴァの戦い　『世界英雄と戦史（別冊歴史読本）』新人物往来社　1999.3　pp.176-179
ピョートル大帝とポルタヴァの戦い　上掲書　pp.182-185
四半世紀が過ぎて　『阿部謹也著作集』第十巻月報10　筑摩書房　2000.9　pp.1-4
北海道史管見（上）「移民の世紀」『しゃりばり』227　2001.1　pp.42-45
北海道史管見（中）「北前船の伝統」『しゃりばり』228　2001.2　pp.38-41
北海道史管見（下）「真宗門徒のエートス」『しゃりばり』229　2001.3　pp.30-33
北海道史管見（補遺）「小樽高商物語」『しゃりばり』230　2001.4　pp.34-37
『角川世界史辞典』編纂協力 / 執筆　角川書店　2001.10
「アメリカ村」のことなど　辻内鏡人追悼文集編集会議編『言葉：辻内鏡人さん追悼集』辻内鏡人追悼文集編集会議　2001.12　pp.128-129
拙著その後　「成文社リレー・エッセイ」45　2002.1
［http://www.seibunsha.net/essay/essay45.html］
「コサック（カザーク）」「雑階級人（ロシアの）」「流罪／流刑」「ロージナ」『歴史学事典』第10巻（身分と共同体）　弘文堂　2003.2
ヤロスラフリーの水呑み百姓　『経済史研究』（大阪経済大学日本経済史研究所）７号　2003.3　pp.160-166
エカテリーナ２世とその時代　エルミタージュ美術館展事務局・江戸東京博物館編集『エルミタージュ美術館展：サンクトペテルブルク古都物語：エカテリーナ２世の華麗なる遺産』エルミタージュ美術館展事務局　2004.7　pp.15-17
「イヴァン雷帝」「国家宗教」「サンクト・ペテルブルク」「ツァーリ」「偽ツァーリ」「ピョート

ル大帝」「ラスプーチン」『歴史学事典』第12巻（王と国家）　弘文堂　2005.3
「イワン雷帝」「エカチェリーナ２世」「キエフ公国」「農奴解放」「ピョートル大帝」「モスクワ公国」「モンゴル支配」『国際政治事典』弘文堂　2005.12
私のロシア史事始　『緑丘』（小樽商科大学同窓会報）100号　2006.8　pp.111-115
「世間」論とヨーロッパ社会史研究　『学際』19号　2006.11　pp.119-122
ヤロスラヴリとヴォローネジ―18世紀末の地方社会―　『日本18世紀ロシア研究会 News Letter』No.4　2007.9　pp.6-9
「ウォトカ」「橇（そり）」『歴史学事典』第14巻（ものとわざ）　弘文堂　2007.6
新委員長挨拶　『ロシア史研ニューズレター』No.69　2008.2　pp.5-6
弔辞　『阿部謹也　最初の授業・最後の授業』日本エディタースクール出版部　2008.9　pp.222-225
文庫版あとがき　『ヨーロッパ近世の開花』（世界の歴史17）中公文庫、中央公論新社　2009.1　pp.587-591

編集後記

本目録の作成経緯について、簡単に記しておきたい。

もともとこの企画は、2010年３月末の土肥恒之先生ご退職をお祝いし、学恩に感謝しようと、2009年９月27日に上智大学でおこなわれた地域史研究会の席上で決まったものである。研究会は、学部・大学院時代、土肥ゼミに参加し、西洋地域史研究について先生の薫陶を受けた教員・大学院生からなり、当日は渡邉昭子、青木恭子、森永貴子、岩崎周一、森宜人、柳沢のどか、高橋暁生各氏、および石井の８名が参加していた。柳沢氏が「一橋社会科学」との交渉役を担当し、石井がまとめ役となった。

土肥先生に著作目録作成の趣旨をお伝えしたところ、先生から別の折にご自分でまとめられた著作目録を提供していただいた。そこで、これを素材として書誌事項の確認をおこない、できあがったものが本著作目録である。万全を期したつもりだが、なおも遺漏・誤記等があればその責任はまとめ役の石井にある。

なお、編集作業終了後、本年4月に先生の論文集が刊行予定との連絡を受けたものの、諸般の事情から本目録に収めることを断念した。他日を期したい。

2010年３月、雪解けすすむ札幌にて　石井健